

「デトロイト美術館展」

一目を見張る秀作と新しい美術展の作り方に注目—

S26年 久津 正行

今、「上野の森美術館」で、近頃出色の美術展が開かれているのを一言触れておきたく、質の高い印象派、後期印象派の絵画の作品展示に目を見張るばかりか、洒落た展覧会の作り方にも思はず唸らせられた。デトロイト美術館は略、100年近い前に設立された近代絵画中心のアメリカの



公共美術館である。もう45年前ごろになってしまうが、中米の駐在員の頃、ニューヨークに出張中にデトロイトに行ったことがある。帰りを急がされたので、デトロイト美術館の前を素通りしてしまった。ずっと後になって、残念なことをしてしまったと思っていたまま、今日まで見ずじまいになってしまった。今回数々の珠玉の作品の内52点が出品されている。

アメリカの美術館といえば、メトロポリタン美術館、ボストン美術館、ワシントン美術館の様な総合的大都市美術館はさておき、19世紀のフランスを中心とした名画に特化した美術館として目立つ存在は、フィラデルフィアのバーンズ財団美術館と今回のデトロイト美術館が双壁であろう。

今回の美術展の展示に深い関連を持った、美術展が1994年1月に国立西洋美術館で開催された。二度と来ないであろうと云われたバーンズ・コレクション展であった。

創立者アルバート・バーンズ氏の遺言で作品は門外不出と決められていたが、時代が変わり、施設の老朽化のため、この年その資金捻出のため、ワシントン、パリ、東京への巡回展が実現し、いづれもコレクションを代表するにふさわしい粒ぞろいの作品80点が展示された。同じように、今回のデトロイト展は数こそ少ないが、同じ印象派の作家、ルノアール、セザンヌ、モネ、ゴッホ、ゴーガンなどのどの一点をとっても画家の代表作に数えられる名作が展示された。いつの間にか22年も経っているのである。

アメリカにおけるコレクターの活躍とデトロイト美術館開催の経緯

19世紀にフランスで華咲いた印象派時代に注目したアメリカの実業家はキュレーターと組んで競ってフランスに飛び、名作を買いあさった。その活動は、ロックフェラー、ポール・ゲッティ、アルバート・バーンズ、フォード家、ロバート・タナヒル（デトロイト美術館のコレクター）など石油、自動車工業、化学工業分野などで得た財力をつぎ込んだ。その中でも、バーンズ・コレクションとタナヒルのデトロイト美術館が質の高い作品を揃えている。前述のようにバーンズ・コレクションは美術館改修に腐心したが、デトロイトの方は2013年にデトロイト市の財政破綻を機に、美術館の所蔵品売却の可能性が大きく取り沙汰された。しかし、市民や全米の愛好家から、名画の散逸を懸念し全米に資金を募ったところ、9財団をはじめ内外の愛好家よりの協力により、危機を回避でき、作品は一点も失われることなく、美術館は市民や、愛好家の憩いの場として存続し、今回日本での開催の運びとなった。



モネの「グラジオラス」

デトロイト美術展の主な展示品

自動車工業都市デトロイトが好況だった時代にフォード家が中心となって名品を収集した美術



ルノアールの「座る浴女」

館を象徴するアメリカの産業風景を表現した、ホールのフレスコ画を再現してくれている。メキシコのディエゴ・リベラに書かせており、アメリカの美術館としてはユニークである。展示絵画は、印象派では、ルノアール 3 点、モネ 1 点、ドガ 5 点などその中には色彩豊かな生命の輝きそのものの様なルノアールの「座る浴女」や光が花や葉にあたってはじける瞬間を捉えたモネの「グラジオラス」などがあり、後期印象派ではセザンヌ 4 点、ゴッホ 2 点、ゴーギャン 1 点などで、なぜか何度でも見たくなるセザンヌの「画家の夫人」や生涯の主要なテーマである「サント＝ヴィクトワール



マチスの「ケシの花」

リアーニ 3 点などで、デフォルメしながら女性の感性を見事に捉えたピカソの「読書する女性」や花火のように目を楽しませてくれるマチスの「ケシの花」など、日本で初めて見る名作を含め 52 点は一つ一つ、人々の目を捉えて離さない。

デトロイト美術展の美術展としての新しい捉え方

今度の美術展にはちょっとした仕掛けがある。優秀なキュレーターであり、新しいタイプの小説家としてご活躍の原田マハさんが絡んでいる。以前「芸術新潮」に 4 回にわたって「デトロイト美術館の奇跡」という実話ストーリーを出していて、それがデトロイト美術展開催の一週間前 9 月 30 日に単行本として新潮社より発売された。

アメリカ史上最大の一都市の財政破綻で市の財産である美術品でしか救う道なしといわれる中を、市民と愛好家や同業者集団が資金調達を実現したアメリカ人の善意、市民の絵に対する愛惜の情をうまく捉えている。そして 10 月 7 日に開催された。上野の森美術館は、この本と連動しており、ガイドも丁寧であり、且つ、月曜日火曜日は作品の写真撮影を自由とした。

20 年前にあった同質の美術展に比べてみると、バーンズ・コレクションではカタログもよく出来ており、アカデミックな高階秀爾氏の解説も申し分ないが、教養文献の硬さで教えようとしており、同じタイプの展覧会ながら、IT 時代となった今日、一緒に観賞しようという配慮が随所に見える。

日本のコレクター達

19 世紀—20 世紀に亘り日本のコレクターはどうしていただろうか。アメリカのコレクターと同様かなり活躍していたようである。即ち、大原孫三郎氏、松方幸次郎氏、石橋正二郎氏、福島繁太郎、何人かの画家たちは、同じような着眼点でそれぞれ印象派以降の画家の秀作を集めている。今日、大原美術館、国立西洋美術館、ブリッジストン美術館、などに残されているが、日本の場合、第一次、第二次世界大戦の影響を受けており、集中的に名作を取り込むチャンスを逸して来たこともあり、今日見る限り、系統的な名画の入手という点ではアメリカに一步譲らざるを得なかったわけである。

さて、今回見終わって思うことはタブレットの性能も上がり、印刷より原画に近い実像として収納できることになると、繰り返し、繰り返し名画を訪ねることができ、例えばクセザンヌの「サント=ヴィクトアール山」は、1904年のデトロイト美術館像所蔵の作品が最もクセザンヌのコンセプトを正確に表現している> と容易に他の同名の作品と比較することができる。その意味で、正確且つ幅の広い観方ができるのではないかと期待したい。